



狂

言

記

上



狂

言

記

上

昭和四年十二月十日
昭和四年十二月十三日

印刷
發行

有朋堂文庫
狂言記上卷

(非賣品)

編輯者

塚本哲三

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地

印刷者兼
發行者

三浦捷一

東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷所

有朋堂印刷所

東京市神田區錦町三丁目九番地

發行所

有朋堂書店

東京市神田區錦町一丁目十九番地

不許複製

緒言

一中古以來行はれたる猿樂が、滑稽なる所作を事としたるは、物語草子の類にも散見する所なるが、室町時代に至りて、猿樂の能（即ち今日云ふ能樂）大に發達すると共に、本來の猿樂は却て狂言の名の下に其特質を發揮し、莊重嚴肅なる能は、諧謔縱横なる狂言と相俟ちて演ぜらるゝに至れり。能の材料は多く古代の神話傳說史蹟等を主とせるに反し、狂言の資料は大抵日常俗間の事件に據れり。彼は古歌古文の趣味を根柢とし、此は俗語俚諺を有體に傳へて、當時の世相を赤裸々に示せり。隨て舞臺上の人物亦その間に大差あり。狂言に於ける大名も坊主も山伏も目代も鬼も閻魔も、皆その知能力量に於ける弱點を暴露し、以て好笑の料に供せられざるなし。誰か能に比して異彩あるを思はざらむや。即ち狂言は、喜劇的文學として國文學中に價值を有するものと云ふべし。

一狂言の詞遣には、獨白と對話とあり。本文に於て此の二者錯綜す。これ最も讀者の留意を要する所也。詞の外に語かたりの部分あり、小歌、謠、噺物など音曲的部分もあり、又能がかりの物即ち仕舞狂言もあり。これらの諸體は、乞ふ之を本文につきて會得せられむことを。

一 狂言の役名は主なるをシテ又はオモと云ひ、脇役をアドと云ふ。其他役割の名前によりて、殿、太郎冠者など呼ぶこと多し。

一 狂言道には古來主なるもの三流あり。大藏流、鷺流、和泉流これ也。

一 本書は則ち和泉流狂言の詞書を收む。繪入狂言記と題して元祿年間に大成せられたる刊本四部二十冊二百番あり。分つて狂言記、續狂言記、狂言記拾遺、及び狂言記外篇となす。本書は之を底本として編纂し、上下二卷に分ちて上梓す。

一 刊本狂言記は、漢字及び假名の用法に於て頗る不完全なるものあるを以て、本書に於ては漢字は或は訂し或は補ひ、假名も亦力めて語源的歴史的用法に従へり。但し「居ろ」致そ「抱ゆ」「變ゆる」の類は姑く元のまゝとなせり。

一 頭註は、語義出典の大略を掲げ、其未詳なるもの、又は疑はしきものは之を闕く。蓋し狂言記の註釋方面は、實に未開の荒蕪にひとしく、今後の研究に據るべきもの多ければ也。

大正三年二月

校訂者 野村 八 良

狂言記上 目錄

狂言記

卷之一

一	烏帽子折	一
二	櫟糊	六
三	吟 聾	一〇
四	拔 殻	一六
五	貰 聾	二二
六	宗 論	二五
七	萩大名	三三
八	酢 薑	三九
九	七騎落	四四
十	鹿 狩	四七

卷之二

一	福わたし	三
二	こんくわい	七
三	苞山伏	一三
四	伯母が酒	一七
五	二千石	二〇
六	悪 坊	二五
七	内沙汰	二九
八	胸つき	三三
九	茶 壺	三八
十	生捕鈴木	四五

卷之三

一	末ひろがり	九
---	-------	---

二	かくすい	一〇六
三	鈍根草	一二三
四	法師物狂	一二五
五	柿山伏	一九九
六	薩摩守	二二三
七	太刀奪	二三八
八	どぶかつちり	二三三
九	八句連歌	二三五
十	佛師	二四二

卷之四

一	相合袴	二四七
二	粟田口	二五二
三	那須の興一	二五九
四	釣女	二六三

卷之五

五	笠の下	二六八
六	あかどり	二七四
七	文山賊	二七八
八	舟ふな	二八二
九	柿賣	二八六
十	二人大名	二九〇

一	羯鼓炮碌	二九五
二	伊文字	二〇一
三	文藏	二〇七
四	武悪	二一四
五	富士松	二二三
六	花子	二二〇
七	長光	二二七

八	腹たてず	二四三
九	脛 薑	二四七
十	緝 繩	二五一

續狂言記

卷之一

一	連歌毘沙門	二五七
二	秀句大名	二六三
三	居 杭	二六八
四	飛越新發意	二七五
五	鶯	二八〇
六	河原新市	二八四
七	子盜人	二八八
八	荷 文	二九二

卷之二

九	針立雷	二九六
十	墨塗女	三〇二

卷之三

一	蛭子大黒天	三〇七
二	鵜立の江	三一
三	雁 爭	三一五
四	菊の花	三一九
五	見物左衛門	三二四
六	成上者	三三八
七	寶の笠	三三三
八	土産の鏡	三三八
九	鱧庖丁	三四四
十	瓜盜人	三五三

一	岡大夫	三九
二	竹子爭	三六
三	朝比奈	三七〇
四	暇の袋	三七五
五	鬼の養子	三七九
六	聾座頭	三八二
七	金岡	三八九
八	昆布布施	三九三
九	六人僧	四〇〇
十	寢聲	四〇七

卷之四

一	日近大名	四二
二	櫻諍	四二九
三	六地藏	四三三

四	柑子俵	四二九
五	膏藥煉	四三三
六	俄道心	四三九
七	禁野	四四六
八	猿替勾當	四五二
九	狐塚	四五八
十	どちはぐれ	四六三

卷之五

一	牛馬	四六七
二	入間川	四七五
三	路蓮坊主	四八二
四	箕かつぎ	四八八
五	蟹山伏	四九六
六	素袍落	五〇〇

七	磁石	五〇六
八	三人片輪	五二三
九	算勘聲	五二一
十	節分	五二七

烏帽子折一名
麻生

隠れもない大名
一名乗の詞、我
は知らぬ人なき
大名ぞとなり
念なう一思ひの
外に



狂言記

卷之一

一 烏帽子折

三人

大名 茶筌髪、素襖、小さ刀

藤六 半袴

下六 半袴、かけ烏帽子を持つ

▲大名隠れもない大名。藤六をるか。▲藤六御前に。

▲大名下六は。▲藤六兩人これに詰めてをりまする。

▲大名念なう早かつた。汝等、喚び出す、別儀でない。

明日は正月元日、出仕にあがらうと思ふが、

なにとあらうぞ。▲藤六まことに、國許にござりま

はハツといふ
返事の詞
やい目下の者
に呼掛くる詞

一段一層
うい奴一神妙な
男

折る一烏帽子を
作ること

いかう一大層

美男石一美男
の油

してなりとも、御禮にあがらつしやれませいで、かなはぬ事でござりまするに、あがら
つしやれたらば、ようござりませう。▲大名よからうな。▲藤六は。▲大名やい、して、それ
がしが烏帽子が、剥けてあつたが、何としたものであらうぞ。▲下六心得まして、此中塗
りにやつてござりまする。▲大名一段うい奴ぢや。急いで取つて参れ。▲下六畏つてござり
まする。▲大名急け、えい。▲下六はあ。▲大名戻つたか。▲下六いや、まだ、御前を去りもしま
せぬ。▲大名油断のさせまいと云ふ事ぢや。▲下六はあ。▲大名急け、やい、藤六、烏帽子は
まづ折りにやつたが、して、烏帽子髪などといふものは、結びつけぬ者は、え結はぬとい
ふが、何としたものであらうぞ。▲藤六その御事でござりまする。若し殿様御出仕などと
ござらう時に、御役に立たうと存じ、某烏帽子髪の結びやうを存じて居りまする。▲大名何
ぢや、知つたといふか。一段ういやつぢや。いかう暇のいるものぢやけなほどに、急い
で、来て結へ。▲藤六畏つてござる。▲大名さあく結へ。▲藤六はつ。▲大名やい、そこな奴
某をば、打擲をしをるか。▲藤六いや其の御事でござりまする。此の筒の中に美男石

襟付―襟のやう
す即ち着物の重
ね
赤と紫との交り

もよいか―もう
善いか
ものれ―目下に
向つていふ汝の
意
むさい―汚いと

が、ござりまする所で、御前の御頭へ、つけねば結はれませぬ。▲大名ふん、知らなんだ。
さあ、来て塗れ。▲藤六はつ。▲大名やい、まづ離せ。痛いはな。▲藤六はあ、いや、ち
と結ほれてござりまする。▲大名やい、して、何と、明日の、襟付は、どうしたものであ
らうぞ。▲藤六まづ下には、白小袖を召しませう。▲大名して又中には。▲藤六紅梅がようご
ざりとう。▲大名上には。▲藤六熨斗目を召さつしやれたがようござりませう。▲大名おう、
これは映合うてよかる。さあ、結へ。▲藤六はつ、結びましてござる。▲大名して、
もよいか。▲藤六いやまだ、額に、おだいづけと申す物をつけまする。▲大名さあ、急い
でつけい。▲藤六はつ。▲大名やい、其處なやつ、なぜにおのれが、むさい唾をつけをるぞ。
▲藤六いや、これでなければ、つきませぬ。▲大名つかずば、如何ほどなりとも、はきかけ
をれ。▲藤六はつ、ようござりまする。▲大名して、これははや、烏帽子が遅う来るな。▲藤六さ
れば遅うござりまする。▲大名急いで、おのれは迎にゆけ。▲藤六畏つてござりまする。
▲下六えい、殿の待ちかねさつしやれう。まづ烏帽子を持つて、急いで参る。▲藤六なう下

なう、なう／＼
—共に呼掛の詞
頼うだ—主人を
いふ

をりやる—居る
の敬語従つて在
るの敬語ともな
る

尋ねうザ—尋ね
んとすの轉じた
るにて尋ねんと
欲すの意

信濃國云々—曲
にかゝる離し物
麻生殿—此の大
名のこと

實にもさあり—
誠に然りといふ

六、殿の待ちかにやる。急いで持つてをりやれ。▲下六さうであらうと思ふたい。なうな
う、某が出た迄は、七五三飾門松がなかつたが、今は、七五三飾で、頼うだ御宿を忘れ
た。▲藤六まことに、某も忘れたが、はあ、これでをりやるは。殿様ござりまするか。な
う、此處でも、をりやらぬわいの。▲下六あゝ、某が覺えた。此處でをりやる。殿様ござ
りまするか。わつ、此處でもをりやらぬは。何としたもので、をりやらうぞ。▲藤六某が
思ひつけたは。頼うだ人の、國と名を申して、噺事で尋ねうず。▲下六おう、まことに、こ
れがようをりやらうぞ。して、何と云うて噺さうの。▲藤六物と云うて噺さう。信濃の國
の住人、麻生殿の御内に、藤六と下六と、烏帽子折に参りて、主の宿を忘れて、噺事を
して行く。▲下六あゝ、これが一段でをりやらうぞ。さあ、云うて見さしませ。▲藤六心
得てをりやる。▲下六、藤六 信濃の國の住人、麻生どんの御内に、下六と藤六が、烏帽子折
に参りて、噺物をして行く。▲藤六あゝ、何とやらこれでは、後が淋しうをりやるわいの。
▲下六某が思ひつけたは、あとで、實にもさあり、やよ實にもさうよのと、云うたらばよう

意にて離しの詞
なりさうよのと
いふ離し詞は興
福寺延年舞歌に
も見ゆ

前代—前代末聞
の意

身が前へは叶ふ
まい—目通りを
許さずとの勘氣
の語

ひやろく—笛
の譜にて舞ひ納
まるなり

をりやろの。▲藤六さあく、囃いて見さしませ。▲藤六、下六信濃の國の住人、麻生どんの御
内の、下六と藤六と、烏帽子折に参りて、囃物をして行く。實にもさあり。やよ實にも
さうよのく。▲大名如何にや如何に、汝等、主の宿を忘れて、囃物をするとも、前代の
曲者、身が前へは叶ふまい。▲下六はあ、これでをりやるは。▲藤六さあく、囃しやれく
▲藤六、下六主の宿忘れて、囃事して行く。實にもさあり。やよ實にもさうよのく。▲大名
如何にや如何に、汝等、忘れたは憎けれど、囃事が面白い。▲藤六、下六實にもさあり。や
よ實にもさうよの。▲大名何かの事はいるまい。先づこちへ、こさいつて、まづ烏帽子著
せやれ。ひやろく、とつばい、ひやろの、ひ。

二 榛 糊

二人 殿 長袴、小さ刀
冠者 半袴

新知—新增の領地
くわつと—意外に多くといふ意
肩衣—武家の小禮服 衿杯の衿ばかりをいふ

物によそへて—何物かに擬へて

物の本—讀み物

▲との御存じの者。太郎冠者あるか。▲冠者御前に。▲との念なう早かつた。汝を喚び出すは、別儀でない。此中御前につめてあれば、新知をくわつと下された。何とめでたい事ではないか。▲冠者これはおめでたい事でござりまする。▲とのそれにつき明日は、出仕に上らうと思ふが、彼の紺屋へ遣つたる、肩衣は張つて参つたか。▲冠者されば、取りに参りてござるが、何やら足らぬと申して、張つてくれませなんでござる。▲との紺屋に足らぬ物ならば、簞絹張のやうな物ではなかつたか。▲冠者いや、さやうな物ではござりませなんだ。▲との退り居ろ。おのれがやうなる鈍な奴は、物によそへて、聞いて來たがよい。▲冠者いや、よそへて参りました。▲とのして、何によそへて來たぞ。▲冠者殿様の、いつも四疊半敷へ、取籠らしやれて、讀ませらるゝ物の本の内に、有るかと存ずる。▲とのふん、

牀几―腰かけの
一種なりそれを
持來らしめて自
らかゝるなり

大手―表口

云つば―云へば

押付―鎧の背と
革とを横に界す
る板

某それがしが好すいて讀よむのは、源氏平家の物語ものごとなどを読よむほどに、一つ二つ讀よまうほどに、有あらば有あると、聽やがて答こたへ。▲冠者かしこま畏かしこつてござる ▲との牀几しやうぎ々々。▲冠者はつ。▲とのこれへ寄よつて聞きけ。扱あも、赤間關あかまがき、速はや柄ざもが沖おきにて、おん身みを投なげさせ給たまふ。西海さいかい、四海しかいの合戰かせんのうちに、有あらば有あると聽やがて答こたへ候さうへ。いで其その頃ころは、壽永二年じゆえい ねんの事なるに、平家は時節じせつの思おもひをなし、津つの國生田くにいくたの森もりに陣じんを取る。その城郭じやうくわくは、前まへは海うみ、後うしろは嶮けはしき鵜島越ひよざりえ、左ひだりは須磨すま、馬手うては明石あかしよな。大手おほてには、生田いくたの森もりをこしらへし、そのあひ三里りが間あひだは、滿みち滿みちたりしよな。陸くわに赤旗あかはたいくらもく立てならべ、天地翻てんちひるがへす有様ありさまは、宛然きながら錦にしきを張はつたるが如ごとく。此やうの様な物ではなかつたか。▲冠者かしこ張はつてだにござるならば、よこしませうが、その様な物ではござりませなんだ。▲との茲こゝに又梶原かぢはらが二度ふたたびのかけと云いつば、梶原平三景かぢはらへいざうかひ時とき、源太景季げんだいかげすき、後陣平山ごじんひらやまの武者所季重むしやどころすゑしげが一ひとの木戸きどを切きつて落おし、分捕ぶんとり高名數かうなみかずをつくす所に、かくて、梶原本陣かぢはらほんぢんに歸かへり、源太げんだはと尋たづねしかば、源太げんだは敵かたきの方かたよりも、押付おしつけを見みせうする事を不覺ふかくと思おもひ、深入ふかいりをし、鎬しのぎをけづり鐔つばを割わり、攻め戰たたかふを見て、梶原取かぢはらつて